



四万十町
町内「ふら〜り」散策

富 とみ

岡 おか



「道」

の駅あぐり窪川」の向かい側に
あるガソリンスタンド脇を東
に入る。そこから1kmほど行っ
たところから、山沿いをさらに進んだ
ところにある仁井田川に架かる橋あ
たりまでが富岡である。右折してこ
の橋を渡ると向川。真つすぐ行けば
中ノ越である。中ノ越の巻で記した
が、国道が整備されるまではこの道
が主要街道であった。現在この道の
南側は田畑になっているが、戦後し
ばらくするまでは、この田畑も山林
であった。

さて、富岡は不思議な地区である。
過去に一度消滅しているのである。
江戸時代、野中兼山によって大規模な
灌漑^{かんがい}工事が行われたが、この地区はそ
の対象に入らなかった。というよりも、
当時は隣接する平串村(元禄の頃まで
は平串村は川井村といった)の一部で
あり、右記のとおり山林地帯であった
この富岡地区には農地がほとんどな
かったと言つて良い。幕末近くになつ
て、富岡は平串村から分村して富岡村
となるのであるが、農地が整備されて
いないままの山間の小さな集落では
生活は困窮を極めたという。生活苦か
ら次第に村を離れる人が続き、とうと
う住民がいなくなつてしまったのだ
がある。しかし、住民がゼロになったと
はいえ、田畑もあれば、地区には祀^{まつ}ら
れていた氏神様もある。それらは平串
村の住民たちが代わりに管理してく



地区の方が保存されていた写真。
平串・富岡・中ノ越の位置関係が
よくわかる。

れていたという。

やがて時代は進み、戦後の混乱期
に入る。政府と県は戦後の食糧難を
補うためこの富岡に着目。ここを政
府が田畑として開拓し、満州やシベ
リアから帰国して職を求める人々に
払い下げたのである。敗戦と同時に
命からがら引き上げて来た彼らはこ
の地で懸命に耕作した。しかし、混
乱期とはいえ当時の政策はかなりお
ざっぱなもので、開墾間もない圃^ほ場
は地力もなく、それに加えて、当時は
まだ十分な農業用水を確保できず、
彼らの農業経営は大変厳しいもので
あった。やがて、農業以外で生計を立
てていく人が増え、また、農業での可
能性を求める人は、ブラジルなどの
海外へ渡つていった。

現在は、農業用水も整備され、17世
帯35人がおだやかな暮らしをおくつ
ているのだが、高知道延伸のコース
になっていることで、便利になるこ
とと生活環境の変化との狭間で住民
たちの頭を悩ませているということ
である。

町のうごき

(1月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	8,380	-34	男 3	26	7	18
女	9,387	-25	女 2	14	9	22
計	17,767	-59	計 5	40	16	40
世帯数	8,605	-25	(1月中の届出)			
窪川地域	12,459人		大正地域	2,546人	十和地域	2,762人

四万十川の 水質状況

	適正值(mg/l)	2月6日
リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下
硝酸	≤ 0.5	0.306
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.35
化学的酸素要求量	≤ 10.0	測定範囲以下

調査：大正（吾川）
資料：四万十高校自然環境部